

Stone Letter Project

2022 年度活動報告



チラシデザイン (UMMM 北原和規)

「Stone Letter Project #5—圧縮と解凍」展報告

本研究プロジェクトは、京都芸大の倉庫より発見された明治以降に印刷産業で使用されていた石版と発見された石版をめぐる情報を記録し、後世に残していくアーカイブを作成することを目的としています。

1970年頃、日本専売公社京都印刷工場から京都市立芸術大学（以下、京都芸大）に、タバコのパッケージなどの印刷に使用されていた大量の石版石が移管されました。教育の場での再利用を目的として移管されたこれらの石版石は、西洋画科、デザイン科、彫刻科に分配されました。当時の西洋画科の版画制作教室（版画専攻の前身）では多くの学生が石版を手がけていましたが、金属版の普及もあり、版画以外の専攻では使用する学生は多くはなく、多くの石版は移管された状態のままで、今熊野校舎を経て1980年のキャンパス移転後の沓掛校舎の倉庫に約40年間保管されたままになっていました。これら340枚の石版石の調査をきっかけにスタートした本プロジェクトの研究報告として、展覧会「Stone Letter Project #5—圧縮と解凍」を11月19日～12月11日までギャラリー@KCUAで開催することができました。

展覧会では、プロジェクトで使用している全ての「石版石」と、当時と同じ方法で図像を新たに紙に刷って記録した「印刷物」、研磨された石版に投影された「映像」の3つのメディアをインストールしました。

石版石は倉庫で積み上げられたまま保管されていた状態を再現し、「層＝レイヤー」としての石版の分厚い断面を提示しました。個人が情報を簡単に入手し、手軽にプリンターで複製出力できる今の時代に、物質的な質量を伴う石版印刷にあらためて実際に触れる機会となり、写真や画像などを記録し生成させる支持体としての「メディア」が、現在でも依然として「物質」であることを再認識する機会になりました。

また、石版に残されている分版された図像を、当時と同じ方法で紙に刷って記録した印刷物などを壁一面に展示し、積み上げられた分厚い石版から紙に写し取られたイメージの軽やかさとの対比を提示しました。そもそも石は、物質が時間をかけて圧縮されることで生まれます。重い石版を倉庫から一枚一枚運び出し、版面上の硬化したインクを洗い落とし、石版プレス機を使用して紙に印刷する作業は、パソコン上での圧縮された大容量のデータの解凍作業に似ています。同時に沓掛校舎の片隅の倉庫に積み上げられ、物質的な厚みと時間の層が圧縮された石版を解凍するように明らかにしてゆくことで、京都芸大の沓掛時代の歴史の断面を違う視点で記録することにもなると考えています。

映像作家の林勇氣さんに依頼し、石版石に施されていた有名なタバコのパッケージ「ピース」のイメージを実際に金盤と金剛砂を使用して研磨して消去する映像を制作していただきました。その映像を、研磨して表面に何も描かれていない石版石をモニターとして、マッピング投影しました。石版印刷では、石版石の表面を研磨すれば何度でも新しい版として使用できます。保管されていた石版石は明治から昭和初期まで実際に使用されていたもので、約130年の時を経て明治以来の記憶を留めています。同時に、石版石の表面に残されているのは、最後に描画・印刷された図像の痕跡です。それを研磨して図像を消去することで、新たな表面が再生し、新しいイメージを描くことのできる未来を石版でつなぐことができます。同時に、これらの石版は、印刷産業の歴史の中に何層にも重なったイメージの集積と消去の歴史を語りかける、先人からの手紙でもあるのです。

私たちの周りには印刷物が溢れています。そしてその印刷物のほとんどは、オフセット印刷で刷られています。

今日の印刷産業で主流のオフセット印刷や版画で使用される金属版は 1 回限りでその役目を終えますが、オフセット印刷の源流でもある石版印刷では、石版石の表面を研磨すれば何度でも新しい版として使用できます。

「Stone Letter Project #5—圧縮と解凍」展では、当時の印刷産業を牽引した石版の記録や記憶媒体としての強度と性能を実感するとともに、プロジェクトを通して私たちが経験した、過去と現在と未来を往還する体験を多くの人と共有することができたのではないかと思います。

田中栄子